山の奥

僕の胸の中にはもう一人の僕がゐます
彼の胸の中にも　なほ　別の僕がゐます
山の奥には谷川のはげしい流れがあり
両岸には角のまるくなつた大きい岩石がころがつてゐます
迫りあふ岩石の根もとは淵になつてゐて
すきとほつた水が　かき乱されて渦を巻き
山の緑をその上にうつし崩しながら流れてゐます
風が吹くと　いつせいに木の葉はゆれてゐます
瀧の落ちてゐるのは　はるか彼方
僕が瀧に近づかうと思ひはじめた時
僕の胸の中のもう一人の僕も同じ思ひだつたのです
彼の胸の中にゐる別の僕もさう思つたのか
もう　ずつと先の道を行くのが見えます
しかも一人ではありません
無数の僕が　いろいろの方面への道を行くのが見えます
誰が誰だかわからない　たくさんの僕が現はれてゐるのです
ふと気がつくと　しづかに羽毛のやうな白いものがふつてゐます
しんしんと　速度をはやめ　量をふやし
すべてを白く塗りつぶしてゐます
一瞬前までは　だんだらの濃緑であつた木立も
身動きもしないではありませんか　木立はだまつてしまひました
谷川の流れも　重い雪のために　はげしさを弱め
ふりこむものをささへるのに　せいいつぱいのやうに思へます
僕が自分をたぐり寄せようとしても
無数の彼等は　ある者は足をとられ
ある者は岩の傾斜にわづかにしがみついてゐるばかり
小さい黒い目でおそろしさうに見呆れてゐる者もゐます
困つたことになつたと　僕はもう一人の僕と顔を見合はせます
山の奥の　限りない森厳はどのくらゐのあひだつづくのだらう
悲惨な自分について　いつまでも
僕は考へつづけなければならないらしい